

ハンガリーの日本語教師

— 1910年代から1960年代を中心に —

小川誉子美（横浜国立大学）
ogawa-yoshimi-tr@ynu.ac.jp

【要旨】

日本からヨーロッパに渡り日本語教師となった人々の記録は、19世紀の後半にさかのぼる。ハンガリーには、第一次世界大戦前、戦間期、第二次世界大戦下、さらに、冷戦時代にも日本から渡った人々が断続的に日本語を教えていた。貿易など実務上日本語が必要であったわけではない時代に、ハンガリーで日本語を学んだ人々は、地理的に遠い日本についてどのような知識を求めていたのだろうか。日本語を教えた人々は何のような目的をもって当地に渡ったのだろうか。本稿では、五名の日本人を紹介し、共通点を探ることで、時代や地域によって、日本語学習の目的や、当地に滞在する日本人の関心が異なることを示す。ハンガリーと他の欧州の相違点を探り、日洪関係や当時の国際環境や双方が共有する学問との関連から、当時求められた教師像について考察する。

1. 目的

言語教育の現場において母語話者に期待される役割は多様である。一方、その土地に渡り、日本語教育に携わった経緯も様々である。しかし、そこには一定の傾向がある。特に、時代をさかのぼってみると一層顕著に見えてくる場合がある。本稿はその一例として、ハンガリーを取り上げる。戦間期のハンガリーには多くの日本人が渡り、日本語教育も断続的に行われていた。ハンガリーは、戦間期に日本が初めて文化協定を締結した国でもあるが、東西の冷戦時代には国交が途絶えた時期もあった。ハンガリーで日本語を教えた人々に共通するものとは何だったのか、他の欧州と相違点はあるのか、1910年代から60年代の60年間に焦点をあて、日本語教師となった人々がハンガリーに向かった経緯や、彼らの活動を辿る。最後に、ハンガリーの日本語教育の歴史を紐解くことでどのような視点が得られるのかという点についても考察したい。

2. 日本語教師たち

ハンガリーにおいて、20世紀の前半、1910年代から60年代までの60年間に、ハンガリー人の日本語学習を支援し、日本語を教えたことが確認できるのは、次の人々である¹。()には教授の時期と機関を示した。

脇水鉄五郎（1914 メツゲルへの個人教授）

外山高一（1921～23 ブタペスト大学²）

¹ 小川（2009）、小川（2010）、小川（2022）による。

² 本稿では、バズマニ・ペーテル大学、エトヴェシュ・ロラード大学の通称で記す。

平野国利 (1924? ブタペスト大学)
今岡十一郎 (1923~31 ツラン団体)
吉川兼光 (?)
徳永康元 (1940~1942 ブタペスト大学)
菅博雄 (1942~? デブレツェン大学)
武井宗夫 (1943~? セゲト大学)
羽仁協子 (1958~1967 ブタペスト大学)

本節では、この中で、第一次大戦前、戦間期、第二次世界大戦下、冷戦時代に日本語を教えた教師から五名をとりあげ、ハンガリーとの関わりを中心に紹介する。

2. 1 第一次大戦前：脇水鉄五郎

ハンガリーで日本語学習を支援した初めての日本人は、管見の限りでは、脇水鉄五郎 (1867~1942, 東京帝国大学, 地質学) であり、脇水に日本語を習ったのは、フィルディナンド・メツゲル (Metzger Ferdinand) である。メツゲルが脇水から個人教授を受けたことについてはメツゲル自身による次のような証言がある。

帝大の脇水鉄五郎教授が私の日本語学習を手助けしてくれた最初の友人であります。脇水鉄五郎教授はブタペシュトの地質学研究所の客員であり、研究職所長のローツィ・ラヨシュ氏のもとで地震学の研究に従事していました。ブタペシュトには日本人居住者は誰もいませんでした。最初に日本を訪れたとき、私は田園調布の脇水家を訪ねました。

日本東欧関係研究会 (1982:103)

メツゲルとは、戦間期にハンガリー王国時代の在京公使館で通訳官をつとめ、ハンガリー語と日本語の大辞典を出版した人物であるが、日本人滞在者が一人もいなかったころのハンガリーで、彼が日本語学習に向かったきっかけは、日露戦争であったという。ソヴィエトに隣接し、ロシア帝政下にあった地域や、列強の支配下にある国々では、大国ロシアに対する日本の勝利がひとときわ歓喜をもって迎えられた。自分たちを抑圧する大国に打ち勝った極東のそれまで知られていなかった日本に関心があり、希望を見出し、独立への期待を膨らませながら愛国心を駆り立てていった。メツゲルもその沸き立つ歓喜と愛国心の渦の中にいた³。

一方、脇水鉄五郎とは、日本における森林立地・地質学の創始者として知られている地質学者であるが、ハンガリー訪問の経緯についても記しておきたい。東京帝国大学在職中、47歳でドイツに留学す

³ 日本語の学習に関する問に対し、メツゲルは書簡で次のように回答している。「私が何故に日本語を学ぼうとしたのか。それはプッチーニの蝶々夫人が理由ではありません。まだ私が中学生だった頃、『新報』という新聞を刷っている印刷所の脇を登下校のとき毎日通りました。ちょうどその頃、ハンガリーでのマスコミをもっと賑わせていたのは、1904~5年の日露戦争でした。私は靈感に促されて毎日の記事に目を配るようになり、乃木大将、黒木大将、大山元帥、津島元帥、東郷平八郎海軍大将、明治天皇、旅順口といった名前に魅惑されました。…私は乃木さんや東郷さんがロシアの世界的野望をくい止めることによって正義を行ったのだと感じました。私は武士道と愛国心の真価を認識することを学びました。」日本東欧関係研究会 (1982:103)

るが、ドイツ留学の半ば、ブタペストに居を移して研究生生活を送ることになった。その理由は次のようであった⁴。

その道の大家（ただし、他の国人よりは未だ大家とみなされておらぬ）トレイツ氏を訪ひ候所大に歓迎せられ二日間ブ府の付近にともに地学的遊行をなし段々氏の所説を聞き其研究の方法を見るに及び果して真の科学的土壌学は独逸になくして此国にあるを発見し是まで独米を基礎として学び居たる我々の土に関する思想は既に世界の一角に於て時勢に後れ居るを感じ直ちに節を折りて来十一月一日より約三ヶ月間同氏の許にありて土の新研究を学ぶことに決定到候

（大正2年10月17日ミュンヘン発理事長宛書信）

脇水は、ピーター・トレイツ氏⁵との出会いにより、「真の科学的土壌学」は、ドイツやアメリカではなく、ハンガリーにあると確信してただちにハンガリーに移るのである。ドイツ留学については、帰朝報告で、「伯林及ミュンヘンに於て私の専門とする土の研究をいたしました、何れの学科も優れた大学者を有するといはれた独逸にも土壌に就いては其人がなく研究の程度方法も進んでおらず私共が書籍の上で知っている程度位でありまして失望致しました」と見切りをつけ、「(トレイツ)氏の説を聞き研究の方法を見るにつけ研究も進んでおり考へも独逸学者とは異なっておると発見しましたから氏の勧めにより王立地質調査所に入り客分の待遇を受けて研究をいたしました」とハンガリーに渡った経緯を記している。

初め小生は此市には本月一杯位居り夫より露国に四五ヶ月居る考に候ひしが来て見ると中々学ぶことが多いのと研究の方法は露国も此地も殆ど同一なると露国よりも此の地の万事好都合なると種々の点より当地の滞在を長くして来る4月末位まで茲にとどまり露国のほうは1ヶ月ぐらいに短縮せんかと考え居候
(1914年1月3日)

脇水は、最終的にロシア滞在も削り、7月14日までブタペストに滞在することとなった。「中々研究すべき事柄が多い」ため、当初の3ヶ月の滞在予定を8ヶ月半に延長しその間にメルゲルの日本語学習を助けたのである。

このように、ハンガリーの黎明期の日本語学習は、10代で日露戦争を経験したメツゲルと、ドイツ留学を切り上げ、求めていた「真の科学的土壌学」をハンガリーに見出した脇水鉄五郎の出会いが開いたものであった。この出会いは、ハンガリー側にメツゲルという日本語通訳を誕生させ、戦間期の日洪関係の高揚を言語面で支えることになったのである。

2. 2 戦間期：外山高一・今岡十一郎

2. 2. 1 外山高一

ハンガリーの高等教育機関で日本語を教えた最初の日本人は、記録上、1921～3年の音声学者外山

⁴ 武田氏（脇水鉄五郎の親族）のご教示により、脇水がヨーロッパに滞在した1912年から1914年の間、大垣出身者の会の会報『塵城会誌』に、欧州からの書簡および帰朝報告が寄せられていたことがわかった。

⁵ ハンガリーの卓越した土壌学者。1909年に第一回国際土壌学会をブタペストで開催している。

高一（1882～1969、東京外国語学校ドイツ語卒）である⁶。本節では、外山がブタペストで日本語とともにモンゴル語も教えていることに注目したい。

外山は、1905年に東京外国語学校のドイツ語学科を卒業（1905）したのち、選科生としてモンゴル語を学んだ。日本ではじめてのモンゴル語辞典『蒙和辞典』（1917、藤岡勝二監修、文信社）の編者としてその中心的役割を担ったのが、蒙古研究会幹事をつとめていた外山であったという。1918年、翌19年には、外モンゴルを旅行し、ちょうどそのころ、東京にはアルタイ言語学の権威 G.J.ラムステッドがフィンランド初代公使として着任した。ちなみに、フィンランド語は、ハンガリー語と同様に、非印欧語族系の言語であり、フィンランドには、自らの出自解明を目的として、ウラル・アルタイ語研究が盛に行われ先駆的な研究があった。こうした中、ラムステッドは、アフガニスタンから中央アジア、モンゴルにかけてフィールド調査を行い、すでに彼の成果は知られていた。日本の言語学者や民俗学者たちは、アルタイ言語学者として該博な知識と経験を有するラムステッドの来日によって、研究の機会を得たのである。ラムステッドが来日して間もないころ、外山は彼に帝国大学への来訪を願う書簡（1920年5月28日付東京）を送っている。それは、東京帝国大学言語学部教授の藤岡勝二の依頼によるものであった。藤岡は、ドイツ留学やモンゴルへのフィールドワークの経験があり、アルタイ諸語や日本語系統論の研究で知られる言語学者である。外山は、ラムステッドと藤岡ら日本の学者との間を取り持つ一方、1921年に第一次世界大戦後の講和条約締結にあたり外務省の囑託として渡欧し、その後日本語を教えたと推測される。

高一の父、外山正一（1848～1900）は、幕末および明治期に、留学生としてイギリスやアメリカに学び、東京帝国大学文学部長、総長、文部大臣をつとめた人物である。また、新体詩の発表やローマ字運動など、国語・国字改良運動を牽引し『英語教育法』（1897）を刊行するなど新時代の日本の言語の課題について最前線で取り組んだことでも知られている。そうした家庭で幼少期を過ごし、当時の言語学研究の主流であった比較言語学者たちと親睦を深めていたことから、高一が渡欧した際、トルコ学や非印欧語研究がさかんなハンガリーに赴き、日本語やモンゴル語について講じる機会を求めたとしても、不思議ではない。しかし、その経緯や当時の教育現場に関する記録は現在のところ不明である。

2. 2. 2 今岡十一郎

今岡十一郎（1888～1973、東京外国語学校ドイツ語卒）は、1922年にハンガリーに渡り現地に根を下ろして両国の交流に尽力した在野の研究者である。日本でもハンガリー専門家の第一人者として知られる。彼は、当地で私的領事と異名をもつほどの交流活動を行い、現地から勲章を授与されている。その活動については多くの報告があるので、本節では、言語に関する活動について紹介する。

今岡がハンガリーに渡ったのは、来日中のハンガリーのツラン運動家⁷バログ・ベネディク（Baratosi

⁶ 外山がハンガリーで日本語を教えていたことは、ウィーン大学古文書館が所蔵する人事記録に記されている。そこには、外山が1921年～23年の間ブタペスト大学（パズマニ・ペーテル大学 Pasmani Peter 現 ELTE 大学）で、日本語やモンゴル語や比較言語学を教えていたこと、ウィーン大学で1924年に日本語講座を担当、さらに、モンゴル語やアルタイ言語学を教えることも希望したが、実現しなかった旨が記されている。

⁷ ツラン運動（トゥーラニズムとも）とは、印欧語族に含まれない、日本人、フィンランド人、ハンガリー人、トルコ人などの非印欧語族の連帯を呼びかけた思想・文化運動のこと。

Balogh Benedik) のドイツ語通訳を務めた際、ツラン運動の日本での普及に協力を求められたことがきっかけであった。1922年にハンガリーに渡り、当地で9年の間、ツラン文化圏の言語文化の歴史を研究した。彼は、ツラン運動家でもあり人文地理学者のチョーノキ・エネー教授にブタペスト大学への入学許可を与えられ、教授の研究室に9年間在籍した。

今岡がハンガリーに渡ったころ、当地で関心を集めていた「アメリカの排日法案」や黄禍論について講演を行ったところ、その論調が注目を引き、幅広いテーマを扱う彼に対し講演や原稿の依頼が相次ぐようになった。そして、複数のツラン団体で日本語を教えるようになった。その一つ、ツラン同盟では英語、トルコ語、フィンランド語とともに日本語講座も開講したところ、日本語は英語の次に人気があり、68名が登録したという(レヴェント 2014)。こうして、ツラン団体で日本語の講習会を担当し、日本に関する数々の講演、執筆活動を行っていった。それほど、当地では日本に対する関心が高かったのである。

ブタペストで学んだツラン民族の起源や歴史に関する関心は、ハンガリーにとどまらず、同族とされるフィンランド語や歴史的なつながりがあるとされるブルガリアにも及んだ。その関心は、のちに該博な知識と膨大な作業を有する辞書作成にも挑んだ。帰国後は外務省に勤務し、大戦中も『ハンガリー語 4 週間』(1942)『洪牙利語小辞典』(1943) 他、多数の書籍を刊行した。

ところが、第二次世界大戦後は両国が相対する陣営に属したため国交が途絶え、これまでの活動は休止せざるを得なくなった。1956年にハンガリー動乱が起こると、民衆側に立って亡命難民に対する募金を行い、それを届けにウィーンまで赴くが、ハンガリー入国が叶うことはなかった。こうした中、ツラン文化圏の言語文化への関心は、ハンガリー語のみならず、『フィンランド語辞書』(1963、日洪文化協会、20000語収録)の作成にまで至った。出版費用の一部は、文部省科学研究成果刊行費補助金により補ったが、ほかはすべて自費であった。

今岡は、日本とハンガリーの両国間の良好な関係を築くべく奔走し、在野の一研究者として、生涯に渡り、ツラン文化圏の研究に取り組み日本に紹介した。日本では、到底採算の取れない東欧の言語の辞書作成に惜しみなく力を投じた。なお、『ハンガリー語辞書』(1973、55000語収録)の完成は、彼が息を引き取る直前であったという。

2. 3 大戦下：徳永康元

徳永康元(1912~2003)は、日洪交換学生としてハンガリー語やハンガリー文化の研究を目的に現地に渡り日本語を教えた。研究題目は、フィン・ウゴル語族の研究であった。ところが、留学中に第二次世界大戦が勃発しヨーロッパが戦果に巻き込まれた。さらに、日米開戦により在外留学生に帰国命令が下り、独ソ戦が勃発したため留学の切りあげを余儀なくされた。このため、日洪交換学生としてハンガリーに渡った日本人留学生は彼一人となった。

回想録によると⁸、徳永とハンガリーの出会いは高校時代にさかのぼるといふ。舞台で見たハンガリーの劇作家モルナールのリリオムからハンガリーへの関心が深まったというが、当時の大学にハンガリー学科はなく、どんな言語でも専攻できる東京帝国大学の言語学科へ進学して、小倉進平(朝鮮語)と金田一京助(アイヌ語)のもとで学ぶことになる。言語学は系統論がさかんな時代、日本語もウラ

⁸ 徳永康元(1982)『ブダペスト回想』恒文社、徳永康元(2004)『ブダペスト日記』新宿書房

ル・アルタイ説が有力で、両先生からハンガリー語の研究をすすめられたが、ハンガリー語を専門とする教員はおらず、前述の今岡十一郎を紹介される。卒業から三年後、1939年に日洪文化協定が制定され、フィン・ウゴル語族の研究をしていた徳永が、小倉の推薦により、交換学生としてブタペスト大学の東洋語学部に留学することになった。東洋学部の主任は、日本語の系統に関しても詳しいプレーレ・ヴィルモシュ (W. Prohle) であった。彼は、日本語とハンガリー語の近縁関係に関する研究「ウラル・アルタイ語族と日本語の比較研究」という論文を書き (ラムステッド 1926)、日本語がウラル・アルタイ語に近縁の関係であると述べていた⁹。このほかにも、ウラル学、アルタイ学で優れた教授が名を連ね、良い環境であったと回想している。また、プレーレ教授の助手や弟子に日本語のできるハンガリー人がおり、その一人トルナイと交換でハンガリー語を学んだという。やがて、岡正雄 (ウィーン日本研究所所長) の紹介で日本語の講師になる。初回の授業については前述の回想録に「3月7日はじめて講義。トルナイも一人、男二人、女三人、小学国語読本巻一使用、明日から巻四をやろう。説明のしようがないから閉口した。ハンガリー語の片言で通した」と不慣れな様子を記している。

徳永はハンガリーに渡る前から、ハンガリーの音韻論学者ラズツィウスの論文を日本語に訳すなど、構造主義音韻論を日本の学界に紹介していた。有坂秀世の『音韻論』(1938)の刊行より前のことである。戦後、東京外国語大学や関西外国語大学で言語学を講じ、日本におけるウラル語学、ハンガリー語学、文学研究において多くの先駆的研究を残した。徳永は、10代でハンガリーの劇作に触れ東京帝国大学では言語学を専攻、フィン・ウゴル語研究を目的に日洪交換留学生としてブタペストに学んだ。外山らに続き、比較言語学や民族学に関心を持つ日本人がハンガリーに引き寄せられ、日本語を教えることになったのである。

2. 4 第二次世界大戦後：羽仁協子

羽仁協子 (1929～2015) は、音楽教育家、わらべうた教育研究者として知られるが、第二次大戦後のハンガリーではじめての日本語教師であったという。祖母は、自由学園の創設者の羽仁もと子である。父羽仁五郎は、マルクス主義歴史家として知られるが、若いときにドイツのハイデルベルク大学やマールブルク大学に留学した経験があった¹⁰。彼女のハンガリー行はこうした家族の力添えのもとに実現した。回想録によれば¹¹、1951年にウィーンへ音楽留学し、その後東ドイツのライプツィヒに渡り、ライプツィヒ音楽院の指揮科を卒業したのちに、1958年にハンガリーに渡った。

羽仁がウィーンに渡った1951年といえば、サンフランシスコ講和条約発効前であり、海外留学は極めて珍しい時期、しかも、冷戦時代の東欧への留学であった。ちなみに、欧州留学の費用は祖父が出資し、当初は1年の予定だったという。冷戦時代に西側からの入国が厳しく制限されていたハンガリーに渡ることができたのは、協子の両親が、ハンガリーを代表する作曲家であり民族音楽者のコダーイ・ゾルターン (1882～1967) に会い、娘を引き受ける約束をしてくれたからだという。

羽仁がハンガリーで日本語を教えることになったのは、「ハンガリーで日本語を教えるなら入国も可能であろう」と父の知人から入国の条件が示され、日本語教育はコダーイの下で音楽を学ぶ入国手段

⁹ 東京帝国大学の東洋史学者白鳥庫吉は、1902年にドイツ留学中に著名なトルコ語学者も名を連ねるハンガリーに移り、プレーレのもと、トルコ語や東洋民族の歴史について研究していた。

¹⁰ 母羽仁説子は教育評論家、兄羽仁進は映画監督、動物写真家として知られる。

¹¹ 羽仁協子・バログ・B・マールトン (1996)『遠くから来た鏡—異文化と物語心理学』雲母書房

であったという。回想録では、日本語のクラスの学生について、次のように述べている。

一般的に男性は昔の国家主義的な時代の日本を好んでいました。私の知り合いの間では、年齢のせいもあって日本語の生徒たちが一番違和感がありました。(…) 打ち解けることができませんでした。日本のくだらない話をしないで、勉強しなさいと言って席を立ち、それで終わりでした。(…) それで、イライラしてあまり近づく気にもならなかった。理由は何かを探しもせず、ただいつも扉をしめていた。もちろん、理解できますよ。私がハンガリーに行ったのは 1958 年ですから、私の授業に来たハンガリー人にとっては、戦後初めての日本人との接触だったわけです。(…) 彼らは依然として戦前の日本との関係をもとに関心を寄せていたのです。

大杉 (2003) によると、羽仁は国粋主義的な言動に反発を覚えていたこともあり、クラスで何度も大声で怒ったといい、本人は日本語を教えるのは手段であり、「片手間だった」と公言するが、羽仁から日本語を習ったビハル・ユディットはその熱心な先生ぶりを「教師の鑑」と賞賛しているという。羽仁自身の言葉は謙遜に過ぎず、筆者 (大杉) が面談の際に得た印象や羽仁を知る人達の評判から、実は立派に日本語教授の責務を果たしていたと推測している。

ハンガリーから帰国後は、コダーイ芸術研究所を設立し、日本コダーイ協会会長に就任、学校経営や数々の執筆活動や講演を精力的に行い、ハンガリーの童話などの翻訳や保育園での音楽・美術教育などを通じ、生涯にわたり、コダーイやハンガリーの音楽教育の紹介と音楽教育活動に尽力した。

3. 小括

本稿では、ハンガリーで日本語学習の支援や教育に携わった五名について紹介してきたが、当時の教え子や教育現場に関するあらたな一次資料の発掘には至らず、これまでの調査内容を断片的に紹介したにすぎない。ここでは、彼らに共通する特徴を四点あげ、同時代の欧州の他地域で教えた日本語教師たちとの相違点をさぐりたい。さいごに、ハンガリーの日本語教育の特徴について、両国を取り巻く国際環境や日洪関係の中で捉えなおし、若干の考察を加えたい。

3. 1 共通点

一つ目は、言語である。留学先のドイツからハンガリーにやってきた脇水や羽仁も、また、日本から直接ハンガリーを目指してやってきた今岡や外山、徳永も、ドイツ語を得意としていた。特に戦前の旧制高等学校で第一外国語としてドイツを選択した者は文学や専門書を原書で読んでいた。一方、ハンガリーは、約 400 年にわたりハプスブルク帝国の一部であり、第一外国語はドイツ語であった。したがって、学術交流も日本語教育もドイツ語によって行えたはずである。この点は、中・東欧の教壇に立った教師たちと共通する。

二つ目は、受講生の日本語講座への期待である。1920 年代の今岡の日本に関する講演会は、常に盛況を極め、彼の担当する日本語講座にも多くの受講生が集まったという。この時期の他のヨーロッパには、このような報告はない。ハンガリーで特に交易など実践的な日本語力が求められていたわけでもないにもかかわらず、受講生が集まった背景については、時代背景の中であらためて捉えなおしたい。

三つ目は、教える側の目的である。彼らは、日本語教授を目的に渡欧したのではなく、それぞれ研究のためにヨーロッパに渡り、偶然にも現地の人々の日本語の学習に携わるようになった。特記すべきは、羽仁協子は入国の条件に日本語を教えることが提示されたという点である。国交のない時代、日本語を教えることを条件として入国が許可されたという時代があったことは、語学教育の本質を考えるうえで重要な点であるが、ここでは立ち入らない。

一方、徳永の場合は、日洪文化協定のもと、交換留学生としてフィン・ウゴル語研究を目的にハンガリーに渡り、日本語講座を担当した。ハンガリーに続いて日本との間で文化協定が締結されたドイツやイタリアにおいても同様に、交換学生が日本語教師となった。いずれも、両国の文化をはじめとした広報活動を名目として様々な任務が与えられていたと思われる。ちなみに、日本がはじめて結んだ文化協定がハンガリーであったことは、日本外交にとって、ソ連に隣接するハンガリーは地政学上重要な位置にあったことによるという。

留学中に期せずして日本語教育に携わった経験について、彼らの回想録や著作の中で詳述されることはほとんどなく、帰国後に、日本語教育に従事したという記録も見当たらない。戦間期や大戦下にドイツやイタリア等で日本語を教えた教師とも共通する点である。彼らにとっての日本語教育とは、偶然にも依頼されたもので、当地滞在中でしか体験し得なかった経験であった。留学生として学ぶ立場のみでなく、教える立場からもハンガリーを知ることができるという点で、貴重な経験であったに違いない。

四つ目は、帰国後の活動である。今岡はや徳永は研究者として、羽仁は教育者として、ハンガリーでの経験をもとに、それぞれの活動を展開した。その発信は生涯に渡り続けられた。彼らの活動や著作はしばしばメディアにも取り上げられ、ハンガリーという国や言語文化を知らしめることになった。当地の経験をもとに専門領域での活動に邁進しながら発信し、ライフワークとして亡くなる直前までハンガリーの紹介につとめたことは特筆に値する。この点は絶対数は少ないが割合からみて、ハンガリー-日本語教育経験者の特徴と言えよう。

3. 2 時代背景

さいごに、ツラニズムと比較言語学の観点から当時の日本語講座について若干の考察を加えたい。本稿が対象とする時代の中でとりわけ戦間期のハンガリーは、艱難辛苦を経験した。オーストリア＝ハンガリー帝国が解体し、第一次世界大戦後に締結されたトリアノン条約によって、領土の三分の二を喪失した。失った領土に残ったハンガリー人はそれぞれの国で少数民族とされた。一方、ロシアに隣接し、歴史的にロシアの強い影響下にあった北欧フィンランドや東欧諸国では、日露戦争における日本の勝利が歓喜を持って迎えられた。ツラン運動、すなわち、日本を同朋と見るその政治思想運動は、日露戦争がハンガリーにもたらした高揚と無関係ではなかった。ハンガリー語が非印欧語族であり、民族のルーツが中央アジアにあるとされるハンガリー人にとって、アジアの一角にある日本は決して極東の遠い存在ではなかった。戦間期のハンガリーにおいてツラニズムの高まりと日本や日本語への関心も無関係ではなかった。すなわち、当時のハンガリー人にとって、日本語の知識や習得とともに、同朋の文化や歴史に関心を持つ人々が多かったのではないかと推測される。

19世紀以降ヨーロッパでさかんになった言語学の分野に比較言語学がある。ハンガリーでは、民族のルーツの解明という点からもトルコ語学や民族学の研究がさかんであり、高名な学者が名を連ねて

いた。当時の日本の状況も同様であった。外山高一がモンゴルを訪問しモンゴル語辞典を作成したのもそのような学問的風潮の中で行われた。徳永康元の恩師もアイヌ語や朝鮮語の研究とともに比較言語学に造詣の深い言語学者たちであった。言語や歴史の研究において、ハンガリーと日本をつないだ最初期の学者は、日本語の起源に関する論文を発表したトルコ語学者のプレーレ・ヴィルモシュと、1907年に彼を訪問した東洋史学者白鳥庫吉であった。徳永はハンガリー留学時代に白鳥先生の旧知の友70歳代のプレーレ教授に面会したと回想している。ハンガリーと日本の言語学者が、自らのルーツ解明にも関わる学問上の関心を共有していたことは、研究上も、相互理解においても大きな意味があったと思われる。こうした関心を共有する中、彼らが求める日本語に関する知識とは、共時的な日本語の構造とともに言語の歴史の変遷であったと思われる。

以上、当地の人々が日本語講座への期待を推測すると教師に求められたであろう技能や知識は今日とは異なるという例を、ハンガリーの日本語教育史から見てきた。各地の日本語教育史を紐解くことで、その時代の対日観と日本語教育や教師への期待の深い関わりが垣間見えてくる。さらに言えば、今日においても、学習者個人の関心とともに、当地で歴史的に醸成された対日観を把握しておくことは新しい土地で日本語を教える教師にとっても重要であるということは言を俟たないであろう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 19K00735 (「ロシア・中東欧の現代日本語教育史の記述—社会主義時代からの変遷を中心に」基盤研究(C)) の助成を受けたものである。関係者の方々から、貴重な情報をご提供いただいた。心より謝意を表したい。

参考文献

- 梅村裕子 (2013) 「今岡十一郎の活動を通して観る日本・ハンガリー外交関係の変遷」『国際関係論叢』 2 - 2 東京外国語大学国際関係研究所
- 大杉千恵子 (2003) 「ハンガリーにおける日本語教育史概観」『国際開発研究フォーラム』 23、大学院国際開発研究科
- 小川誉子美 (2022) 「ハンガリーで日本語とモンゴル語を教授：外山高一の活動」『Rômazi no Nippon』 674、日本のローマ字社
- 小川誉子美 (2019) 「日本におけるフィンランドの紹介—戦後 20 年間の活動内容と意義」『日本とフィンランドの出会いとつながり』 大学教育出版
- 小川誉子美 (2014) 「ラムステッドと日本語学者たち—フィンランド側の資料をもとに—」『ユーラシア都市文化叢書 2 沿バルト海の都市—ヘルシンキ、サンクト・ペテルブルグ、ベルリン— 特集号 ラムステッドとジルムンスキー (2)』
- 小川誉子美 (2010) 『欧州における戦前の日本語講座』 風間書房
- 小川誉子美 (2009) 「黎明期の日本語教授者をめぐって—脇水鉄五郎とハンガリーの関わり—」『ユーラシアの再発見—ユーラシア地域言語論—』
- 南塚信吾 (1982) 「日本とハンガリーの文化交流— A 日本=ハンガリー文化交流の歴史と現状」『日本と東欧諸国の文化交流の関する基礎的研究』 日本東欧関係研究会
- レヴェント・シナン (2014) 「トゥーラン主義運動家としての今岡十一郎」『アジア文化研究所研究年報』 49